公益社団法人国際演劇協会（ITI/ユネスコ）日本センターは、ユネスコ傘下の国際組織である国際演劇協会ITI（International Theatre Institute）加盟の公認団体です。ITIは世界平和と相互理解の促進を希求するユネスコ憲章の精神に基き、演劇による国際交流の増進を目的として1948に年創設され、現在約90の国と地域が加盟しています。

公益社団法人 国際演劇協会（ITI/ ユネスコ）日本センター
Japanese Centre of International Theatre Institute / UNESCO

I.T.I.

I.T.I.NEWS 2023.1.31. No.134

望まれる海外演劇の全国展開

会員の自主企画が活発化
演劇知の宝庫ＩＴＩ

新しい年を迎えました。昨年末開催予定の「紛争地域から生まれた演劇シリーズ」はウクライナからのテキストを紹介したこともあって、あっという間に売り切れ、人々の関心の高さを実感しましたが、これがコロナ禍のために上演中止に至ったことは残念でなりません。同時期、ＩＴＩ英語圏部会の企画として行われたアイルランド３作品の一挙公演は新企画として成功を収めました。会員からの自主的な企画や活動が生まれてくるのは嬉しいことです。

年末に行った文化庁との情報交換では、こうした海外演劇の紹介を全国各地へもっと届けてほしい、という要請もありました。首都圏中心でなく、地方への展開も今後の課題です。

ＩＴＩメンバーは作家、翻訳家、研究者、評論家、俳優、演出家、劇場やメディア関連等、演劇知の宝庫でもあります。多様なルートを通じて、ＩＴＩの活動を活発にしていきたいと思います。又、配信による参加者の増加も多くなってきました。勿論、劇場で舞台の気を感じて創り上げてゆくのが「演劇」の本道ではありますが、劇場に出向くことの出来ない人びとへ届けられるルートのひとつです。

停戦と平和への祈りも虚しく、ウクライナの戦乱は止まず、東アジアでも不穏な空気を感じる日々です。こうした中でも、人間を深く捉え、表現する「演劇」は国際理解と平和を伝道するツールとして重い意味を持つものと思います。

舞台映像を超高精細のデジタル技術で保存、デジタル・シアター化を目指し、演劇の国際交流にも役立てようと、文化庁の「ＥＰＡＤ」事業に参画したＩＴＩ日本センターは、その可能性を検討するシンポジウムを昨年１２月１日に開催した（10ページ参照）

公益社団法人　国際演劇協会
日本センター（ITI/UNESCO）
会長　永井　多恵子

「紛争地域から生まれた演劇１４」『Bad Roads』公演はコロナ禍のため上演中止となりました

ITI日本センターが毎年12月に開催しているドラマ・リーディング「紛争地域から生まれた演劇」は、文化庁と当日本センターとの共催事業「国際演劇年鑑の編集・発行」に伴う特集企画です。第14回の２０２２年度はウクライナ・キーウ在住の劇作家ナタリア・ボロズビト作『Bad Roads』のリーディング公演を予定していましたが、コロナウイルス感染防止対策のため、本番直前に公演中止と判断せざるを得ない状況となりました。本作はウクライナ東部で9年前から始まっていた対ロシア戦争の最前線にインタビュアーとして身を挺したボロズビトさんの許諾を得て、昨年4月から公演の準備を進めていただけに、スタッフ・キャスト、関係者の落胆は大きいものがあります。この作品の内容や背景などについて、翻訳者の一川華（いちかわなな）さんに紹介をお願いしました。（編集部）

ウクライナの現場から過酷な前線報告

『Bad Roads』作品紹介

一川　華（いちかわ　なな）

２０２２年2月24日の早朝、ロシア・プーチン大統領がウクライナ東部の住民を保護するとして「特別な軍事作戦」の開始を宣言した。しかしこれは青天の霹靂ではない。ドネツク州、ルハンスク州からなるウクライナ東部ドンバス地域で戦争がはじまったのは約9年前の２０１４年。『Bad Roads』はその時期を舞台に展開する短編作品集である。

□■　□■　□■

ここで簡単に背景をおさらいしたい。２０１３年末、ウクライナ政府がEUとの連合協定の交渉を停止したことに抗議する市民がキーウの独立広場で反政府デモを行った。当時の親ロシア政権はこの民衆運動によって崩壊（マイダン革命）。ロシア系住民の多い東部では親欧米政権の発足に対し抗議運動が広がった。ロシアはクリミア半島を一方的に併合し、ドネツク州、ルハンスク州では親ロシア派が武装蜂起し独立を宣言。以降、ウクライナ東部では分離主義勢力とウクライナ軍の武力衝突が激化している。

□■　□■　□■

キーウ在住のナタリア・ボロズビト氏は戦争がはじまると自身に質問を投げかけた。難民を自宅に受け入れられるか。国のために死ねるか。兵士と恋に落ちることができるか…。そこで、ドンバス地域の最前線に足を運び、ジャーナリスト、医師、兵士、戦争の影響を受けた人々にインタビューを実施。この経験から「無関心ではいられない」と本作の執筆に至ったという。

□■　□■　□■

『Bad Roads』は6つの短編によって構成される。ナタリア氏本人がモデルと想定される人物が前線を訪れた際の思い出を観客に語る独白劇や、ジャーナリストの女性と、彼女を陵辱する分離派の男性兵士による密室の会話劇など登場人物やシチュエーションは多岐にわたる。いくつかのエピソードに共通して登場するのが「悪路」だ。文字通り未舗装の道路として物理的に出てくるだけでなく、他者の心を理解するまでの道筋―つまりは共感やコミュニケーションの難しさのメタファーにもなり得る。女か男か。親ウクライナか親ロシアか。戦争はさまざまな形で人々の分断を可視化し、悪化させる。

（翻訳家）

左から斉藤淳（劇団俳優座）、西岡未央、寺田路恵（文学座）、岩男海史、柴田美波（文学座）

ドキュメント『Bad Roads』への道

プロデューサー　林英樹

2022年2月24日　ロシア軍、ウクライナへの侵攻開始。

3月1日　ITI日本センター理事会有志による「ロシア軍によるウクライナ侵攻に関する反対声明」を発表。

3月3日　ITI本部、ロシア軍によるウクライナ侵攻に対する「平和と建設的対話への声明」を発表。

「あなた方の活動が私たちに力を与えてくれる」との返信

3月某日　ウクライナ戯曲の情報収集開始。『Bad Roads』発見。即座に原作入手。原作精査、紛争の最前線を取材した作品で戦争による人々の亀裂の深まりを描いた作品。急遽、本年度の上演戯曲に決定。翻訳者を探し始める。難航。

左から亀田佳明（文学座）、生田みゆき（文学座）、斉藤淳（劇団俳優座）

4月～5月　キーウの演劇関係者、作家と上演許諾のため連絡取り合う。「あなた方の活動が私たちに力を与えてくれる」との返信。

6月某日　翻訳者決定。演出家決定。

9月某日　『Bad Roads』初稿完成。同時並行で出演者交渉開始。

10月某日　出演者全員決定。チラシ作り開始。

11月某日　事前読み合わせ。その後、稽古開始。

12月8日　体調不良者出る。

12月9日　9・10日の公演中止発表、11日の公演をめざす。

12月10日　全公演中止決定。（撮影・林 英樹）

ロシアとポーランドの演劇界は今…

ＩＴＩ日本センターが企画・編集・刊行している「国際演劇年鑑」の関連企画として、日本国外の演劇事情をリアルタイムでお話しいただく企画『ワールド・シアター・レポート』シリーズ。今回は10月８日にFile 9「ロシア」（講師：守山真利恵さん、伊藤愉さん）、10月10日にFile10「ポーランド」（講師：岩田美保さん）のレクチャーをそれぞれオンラインで開催後、期間限定でアーカイブ配信も行いました。（**chon-muop 主宰・櫻井拓見**）

リアルタイムで聞く

オンラインとアーカイブ配信

ワールド・シアター・レポート

２０２２年２月24日。プーチン・ロシアがウクライナに侵攻しました。「国際演劇年鑑」（年鑑）編集チームは編集の最終段階を迎えており、この状況をいつ、どう伝えるべきか、緊急会議を行いました。

ロシアとウクライナで今何が起きているのか？　戦争をめぐって目まぐるしく変わる状況の中で、年鑑編集部は現場の声をもって、パフォーミング・アーツの実際の状況を伝えることが喫緊の課題だとする認識で一致しました。

海外の演劇事情を立体的に伝える「ワールド・シアター・レポート・シリーズ（ＷＴＲ）」ではぜひロシアやウクライナを取り上げたいという声が高まりましたが、講師を誰に依頼するかということは、思った以上に繊細な問題でした。

ＷＴＲ制作チームと事務局、年鑑編集部は合同会議を重ね、今回の講師を守山真利恵さん（舞台監督・プロダクションマネージャー）と伊藤愉さん（明治大学文学部専任講師／ロシア演劇）にお願いすることに決しました。

講師の守山さんは開戦時、文化庁の新進芸術家海外研修制度で、ペテルブルクのアレクサンドリンスキー劇場で研修中でしたが、一時帰国を余儀なくされました。今回のトークでは、開戦前後の劇場や町の様子のほか、今ロシアの知人友人がどうしているのかについても伝えていただきました。

伊藤さんには開戦後のロシア演劇界の流れを詳細に解説していただきました。お二人の発表には言葉にならない想いがそこかしこににじみ、現在進行中の戦争を感じさせられました。

なお、ふたりはロシアの演劇誌「テアトル」オンライン版に掲載されたウクライナ侵攻以後のロシア演劇界の動向を共訳しており、その翻訳は、伊藤さんら若手研究者の発行するオンライン雑誌「chemodan.jp」で読むことができます。

報告　後藤絢子（「国際演劇年鑑」編集）

File9 ロシア

ウクライナ侵攻とロシア演劇

▽オンライン＝10月8日（土）19時～20時30分▽アーカイブ配信11月1日～12月1日

File10 ポーランド

ポーランド社会と演劇

▽オンライン＝10月10日（月・祝）19時～20時30分▽アーカイブ配信11月1日～12月1日

２００８年度からＩＴＩ日本センターが発行する『国際演劇年鑑』に寄稿いただいている岩田美保さん（クラ

クフ在住）を講師に迎え、事務局長代理の横堀応彦が聞き手を務めました。

ワルシャワ、ウッチに次ぐポーランド第3の都市クラクフでは毎年12月にBoska Komedia演劇祭が行われ、その年にポーランド国内の劇場で上演された作品の中から選りすぐりの作品が上演されます。今回のレポートでは2021年の同演劇祭で話題になった作品の中から、マヤ・クレチェフスカ演出『父祖の祭』、マウゴジャタ・ボガイエフスカ演出『ワーニャおじさん』、ルク・パーシヴァル演出『三人姉妹』などをダイジェスト映像とともにご紹介いただきました。

またポーランドとドイツの合作によるドキュメンタリー映画『ハムレット・シンドローム』（エルヴィラ・ニヴィエラ&ピョトル・ロソウォフスキ監督）やタデウシュ・カントルのアーカイブセンター「クリコテカ」で開催されている展覧会「パーソナル―カントル舞台衣装」などの紹介を通して、演劇以外の最新のアート事情についても知ることができる貴重な機会になりました。

報告　事務局長代理・横堀応彦

国際演劇協会日本センター72年の歩み

設立初期の資料掘り起こし、小冊子発行へ

国際演劇協会日本センター（Japanese Centre of ITI）は日本の敗戦6年後の1951年に創設されて今年72年目、そして1973年3月創刊された「国際演劇年鑑」は50周年という節目の年を迎えます。

戦前から戦中へ冬の時代を過ごした日本の演劇人はどのような思いで新生日本の黎明を迎え、どのような決意で国際社会に復帰して新しい時代に乗り出そうとしたのでしょうか？

私たちは三四半世紀（さんしはん）に及ぼうとする日本センターの歴史を誇りと共に振り返り、先人たちの初心に思いを馳せ、国際演劇協会の原点である「演劇舞踊を通じた平和構築」を念じながら日本センター設立のルーツを探り、設立の経緯を詳らかにしたいと考えました。

これまでほとんど誰の目にも触れなかった日本センターの資料群を掘り起こして、これからの日本センターを支える若い力と共有しようとするのが「国際演劇協会日本センター初期資料の復刻プロジェクト」です。ただ今編集作業が進む復刻小冊子の発行に向けて、どうか皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

☆本プロジェクトに関するクラウドファンディングのご案内は7ページをご覧下さい

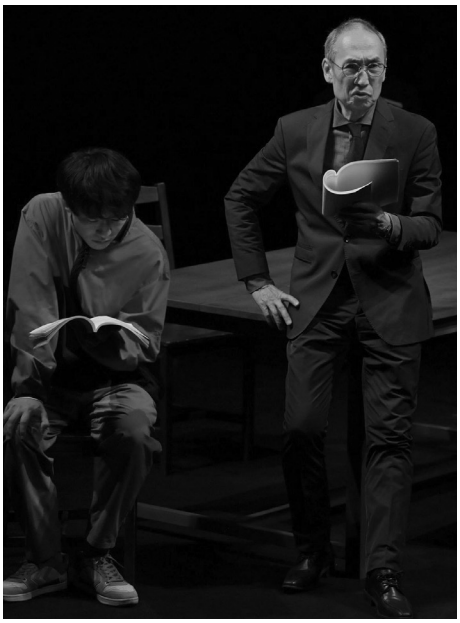
戯曲を読み解き、場面を立ち上げる

海外演劇を撃つ

ワールド・シアター・ラボ

「ワールド・シアター・ラボ」は、海外で創作された現代戯曲の翻訳と上演を通して、次代を担う翻訳者の紹介・発掘と、同時代の世界の現実をよりよく理解する視点に触れる機会をつくることを目的に、文化庁委託の「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」として2020年度からスタートしました。（報告　柏木俊彦＝ワールド・シアター・ラボ　ディレクター、第0楽章、日本演出者協会）

北アイルランド『サイプラス・アヴェニュー』
大森博史㊨　　撮影・おおたこうじ



北アイルランド『サイプラス・アヴェニュー』
スウェーデン『I Call My Brothers』
アルゼンチン『パラナ・ポラー』

2年目を迎える2021年度は、「リーディング公演」「海外戯曲の戯曲読解オンライン・ワークショップ」「海外戯曲の戯曲読解から場面を立ち上げるワークショップ」の3企画を展開。

継続企画の「リーディング公演」「海外戯曲の戯曲読解オンライン・ワークショップ」では、北アイルランド戯曲『サイプラス・アヴェニュー』（作：デビッド・アイルランド、翻訳：石川麻衣）とスウェーデン戯曲『I Call My Brothers』（作：ヨーナス・ハッサン・ケミーリ、翻訳：後藤絢子、翻訳監修：小牧游）の2作品を取り上げました。

スウェーデン『I Call My Brothers』
亀田佳明㊥　　撮影・おおたこうじ

「リーディング公演」（於：上野ストアハウス）では各作品を稲葉賀恵、小川絵梨子が演出。いずれも差別、偏見、レイシズム等を扱う難解なテーマではあったが、美術・音楽・空間も巧みに使い大胆かつ細心に戯曲を立ち上げました。「海外戯曲の戯曲読解オンライン・ワークショップ」ではファシリテートを生田みゆき、瀬戸山美咲が担当。視野を大きく広げる貴重な機会だった等、参加者からの好評の声が多数ありました。

グループディスカッションと身体表現

そして、新企画として「海外戯曲の戯曲読解から場面を立ち上げるワークショップ」を開催。竹中香子のファシリテートの

もと、アルゼンチン戯曲『パラナ・ポラー』（作：マルハ・ブスタマンテ、翻訳：仮屋浩子）を題材に、グループでのディスカッション、身体を使って作品を立ち上げていく試みは新鮮で、加えて、作家がアルゼンチンよりオンラインでゲスト参入。参加者からは濃密な3日間、継続を期待するとの感想が寄せられた。今回も多くの方に支えられて無事に全ての企画が開催できましたことを、この場を借りてお礼申し上げます。

アルゼンチン戯曲『パラナ・ポラー』

第2回クラウドファンディングにご協力を

日本センター設立初期の歩みをたどる「貴重資料復刻版」発行プロジェクト

ＩＴＩ国際演劇協会は、世界平和と演劇人の国際交流の増進を目指すユネスコ憲章の精神に基づいて１９４８年に設立され、日本センターは１９５１年に設立されています。設立当時の世界の演劇状況と日本国内の演劇人たちの動向、政府（外務省、文部省）との連携など、先人の努力の数々が貴重な記録となって今日の日本センターの活動を支えています。当センターはこの膨大な資料を再構築と復刻に努め、ご支援をいただいている皆様に広く公開する作業に着手しました。

これを「ＩＴＩ国際演劇協会日本センター初期資料復刻プロジェクト」と名づけ、第２回のクラウドクラウドファンディングの呼びかけをを開始したところです（２０２２年12月９日から２０２３年２月27日まで）。

このプロジェクトには、１９５１年（昭和26年）の資料や１９７３年（昭和48年）の「国際演劇年鑑」創刊のころまでの重要資料の発掘・解読を通して、戦後の日本演劇がどのように世界演劇と交わり、独自の地歩を築くに至ったかを跡づけようとするものです。これによって、１９５０年代から始まる能・歌舞伎・文楽等の伝統芸能の海外公演や、１９７０年代のナンシー演劇祭（仏）などにおける日本の現代演劇の紹介をきっかけとして、日本の現代演劇が続々と世界各地で上演され、大きな注目や反響を得るに至る歴史のダイナミックな展開をたどることができるでしょう。

この「初期貴重資料復刻版」は２０２３年４月ごろの発行を予定しています。詳しくはクラウドファンディングにおける日本最大級のプラットフォーム「モーションギャラリー」で「演劇・ダンス」カテゴリーの「ＩＴＩ」を検索して下さい。

皆様のご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

英語圏部会

現代新進作家と〝アイルランド演劇の母〟による3作品

アイルランド発✈対立と融和をめぐるモノガタリ

アイルランドは長くイングランドの植民地支配を受け、その対立と抗争の種々相は、今なお世界各地で繰り返されているさまざまな歴史の不条理とオーバーラップします。ITI国際演劇協会日本センター内の活動グループ「英語圏部会」はこれまでの活動の中からアイルランド新旧の2作家・3作品を選び出し、【アイルランド発✈対立と融和をめぐるモノガタリ】と銘打ち、文化庁の補助金AEF2補助事業として2022年12月21日から25日まで荻窪にある「劇的スペース・オメガ東京」で上演しました。作者の一人レディ・グレゴリーは、日本の能から影響を受けて書かれた『鷹の井戸』（1916年初演）で知られるイェイツらと共に民族演劇運動に身を投じ、アイルランド文芸復興の担い手となった一人です。ソニア・ケリーは2012年に劇作家デビューした旬の劇作家。2人の作家に共通するのは、アイルランドにおける対立とその果ての融和に至る道を模索する姿です。　報告　日本センター理事・三輪えり花

レディ・グレゴリー　1852年生まれ。詩人で劇作家のウィリアム・バトラー・イェイツらとアイルランド国民劇場協会を結成、アベイ座を設立してアイルランド演劇の確立を目指した。上演作品にはアイルランド人の民族意識に根ざしたものが多く、〝アイルランド演劇の母〟と呼ばれる。

ソニア・ケリー　デビュー作『The Wheelchair on My Face』がエジンバラ・フェスティバルで新作戯曲賞、続いて『How to Keep an Alien』でダブリン・フリンジ演劇祭で最優秀作品賞、『Furniture』でスチュワート・パーカー・トラスト賞とアイルランド作家組合最優秀新作戯曲賞を受賞。

Aプログラム
『出られないふたり』『月が昇れば』

この公演はAB両プログラムで編成され、Aプロは百年前にグレゴリーが書いた2本の短編を、三輪えり花演出、池辺晋一郎の音楽（酒井絵美のフィドル演奏）で上演しました。翻訳は、英語圏部会の翻訳講座修了生、石井あつこが『出られないふたり』を、そして斉藤健志が『月が昇れば』を担当。出演はNHK連続テレビ小説『鳩子の海』で一世を風靡した藤田三保子、劇団昴出身の田中正彦、オペラ歌手大山大輔、味わい深い演技力の須田真魚、身体表現も得意な菊沢将憲ら5名が熱演しました。

ジャガイモ疫病の飢餓体験

『出られないふたり』は、大飢饉（19世紀半ば、アイルランド島で起きた主要作物ジャガイモの大飢饉。100万人が餓死、病死したとされる）で家も家族も失って救貧院に寝たきりでいる兄を妹が救い出しに来る物語。イギリス側に嫁いだ妹とは縁を切りたい兄と、彼女から施しを受けたい植民地根性の隣人。ベッドを縦に設え、枕元

文化庁「ARTS for the future! 2」補助対象事業
【主催】公益社団法人 国際演劇協会日本センター
【後援】アイルランド大使館
【協力】演劇集団 円、テアトル・エコー、T-PROJECT、トビラボ、ベルジネタレントエージェンシー、ぐるっぽ・ちょいす、東京コンサーツ

には聖書や十字架をぶら下げて、寝たきりを演出した。テンポの良いコメディに、会場は笑いで埋まった。

愛国主義者の脱獄犯

『月が昇れば』は、移送中に脱獄した過激な愛国主義者を追う、懸賞金目当ての巡査部長が、波止場で流しの歌手に出会い、かつては自らも愛国主義者だったことを思い出す物語。家族と自分を守るためには、夢を同じくした者を追わねばならぬ。巡査部長の抱える矛盾と葛藤が、歌によって炙り出されていくドラマは観客の共感を誘いました。百年前の苦難の時代に書かれ、歴史に埋もれていたグレゴリー作品に出会えたことを喜ぶ声が観客から、多く寄せられました。

撮影・渡辺格（３枚とも）

『出られないふたり』
菊沢将憲㊧　藤田三保子㊥　須田真魚㊨

『月が昇れば』大山大輔㊧　田中正彦㊨

Ｂプログラム『橋の上のワルツ』

Ｂプログラムは、昨年、戯曲翻訳部会が【Plays 4 Covid】でリーディング上演した『橋の上のワルツ』を改めてフルスペックで舞台化しました。昨年同様、演出は青柳敦子。翻訳は、協会員でアイルランド在住の石川麻衣。出演は、テアトル・エコーのベテラン田中英樹、国際演劇祭にも多数参加している金子貴伸、そして協会員で演劇集団円の一谷真由美らが、暖かくかつパワフルな演技で観客を魅了しました。

ストーリーテリングの妙

この作品はパットニーブリッジで実際に起きたある事件に触発されてケリーが戯曲にした。登場するのはアフリカ系移民のバス運転手、アイルランド人として自国民を代弁したいと願う弁護士志望者、そして金を稼ぐことに熱中する剛腕ファンドマネージャー。それがテムズ川の南と北を結ぶ橋の上で、同じ事件に巻き込まれる。人種問題、女性の社会進出とそれを阻む壁等、目には見えにくい対立が、それぞれの心の声を観客に聞かせるストーリーテリングの手法で描き出される。ささくれだった心が生み出す対立は、音楽によって融和に導かれるのではないか、と訴えるこの作品は、劇公演にしたことで、さらに多くの観客の心に染み込んだようです。

『橋の上のワルツ』
一谷真由美㊧　田中英機㊥　金子貴伸㊨

舞台装置に円筒のオブジェ

両プログラム共に、舞台装置に円筒のオブジェを取り入れ、「融和」の統一感を持たせるようにしたのも今回の特徴。外部の専門スタッフと連携し、ＰＲ活動にも力を入れ、連日、大勢の観客の温かい拍手をいただきました。この企画は、当センターが一から舞台作品を作る初の試みであり、次の企画への足掛かりにしたい。（敬称略）

特設ＨＰでは、俳優ら各プロフィール他、作品背景など、三輪えり花がアイルランドで撮影してきた写真を入れた、視覚的にも楽しめる読み物を掲載。ぜひご覧下さい。

https://itij2022.com/

デジタル・アーカイブ＆デジタルシアター化支援事業

８Ｋ高精細デジタル技術で舞台芸術の国際交流を

２０２０年以降新型コロナウイルスの感染拡大により、日本の舞台芸術界は苦境に立たされています。そんな困難の中、舞台芸術等を支援することを目的に文化庁からの受託事業として発足したのがデジタル・アーカイブ＆デジタルシアター化支援事業＝Emergency Performing Arts Archive（略してＥＰＡＤ）です。これは舞台映像をデジタル技術で保存し、著作権の処理をサポートすることで商業配信を促進すること、検索サイトやポータルサイトを通じて、新たな活用法を提案することを目指しています。また８Ｋカメラ及びDolby Atmos（R）など最新の映像、音響技術を用いて舞台映像を収録する取り組みも行っています。

本年度日本センターは寺田倉庫株式会社と共に「ＥＰＡＤ実行委員会２０２２」を組織し、永井多恵子会長が代表実行委員を、横堀応彦事務局長代理が実行委員を務め「デジタルシアター化支援事業ＥＰＡＤ2022」（文化庁統括団体によるアートキャラバン事業・コロナ禍からの文化芸術活動の再興支援事業）に取り組んでいます。ＥＰＡＤでは既に約１千３００本の舞台公演の記録映像を収集し、今年度さらに４００本余の情報を公開できるよう作業継続中。

２０２２年12月１日に日本センター主催のシンポジウム『撮る、のこす、使う！』を開催し、オンラインで配信しました。第１部「教育・研究の現場から」と第２部「国際交流の現場から」の２部構成で、舞台公演映像が教育・研究・国際交流の各現場でどう利活用されているのか、またコロナ禍を経てどのように利活用できるのか、その具体的な方法や可能性について議論する場となりました。その他の事業概要やシンポジウム採録の報告書は当センターのホームページでご覧いただけます。

報告　事務局長代理・横堀応彦

撮影・菊池友理（２枚とも）

第１部「教育・研究の現場から」　㊧から横堀応彦（国際演劇協会日本センター／跡見学園女子大学）、梅山いつき（近畿大学）、岡室美奈子（早稲田大学演劇博物館）、多和田真太良（玉川大学）、松山立（日本大学）

第２部「国際交流の現場から」　㊧から三好佐智子（EPAD2022 事務局長／ quinada）、伊藤達哉（緊急事態舞台芸術ネットワーク／ゴーチ・ブラザーズ）、堀朝美（贅沢貧乏）、川崎陽子（KYOTO EXPERIMENT）、成島洋子（SPAC- 静岡県舞台芸術センター）

広告　東宝

舞台芸術の安全・安心な活動環境を守るために

日本センター理事会ハラスメント防止マニュアルを策定

ＩＴＩ国際演劇協会日本センター理事会は２０２２年10月23日に開催された令和４年度第２回理事会で、ハラスメント防止ポリシー、ハラスメント防止マニュアルを策定しました（即日施行）。

最近、舞台芸術業界においても、パワーハラスメントやセクシュアルハラスメントが発生していることが報告され、その防止策が重要な課題と認識されるようになってきました。

ハラスメントは、重大な人権侵害にあたるとともに、舞台芸術の制作、上演などに関わる安全・安心な活動環境を損なっているとする考え方が広く認識されるようになってきています。

当センターにおいても、ワークショップ、リーディング、公演などの創作現場や制作運営管理等の事務部門において、ハラスメントの発生を防ぎ、良好な活動環境を維持・向上させていくことに努める必要があります。

厚生労働省のホームページではパワーハラスメント、セクシュアルハラスメント等の防止対策のために事業主が雇用管理上講ずべき措置として、左記の項目を挙げています。

▽事業主の方針の明確化及びその周知・啓発

▽相談（苦情を含む）に応じ、適切に対応するために必要な体制の整備

▽職場におけるハラスメントの事後の迅速かつ適切な対応

▽併せて講ずべき措置（プライバシー保護、不利益取扱いの禁止等）

日本センターのハラスメント防止ポリシー、ハラスメント防止マニュアルの内容をご覧になりたい場合は、事務局までご連絡ください。（事務局長　曽田修司）

’２２ ＩＴＩ英語圏部会報告　吉岩正晴

2020年１月の「ハロルド・ピンター戯曲勉強会＆懇親会」を最後に、コロナ禍のために公演活動は中止し、月１回オンライン・ミーティングを行い、新訳戯曲の読み合わせ等を続けました。

2022年は12月に、英語圏部会企画立案の【アイルランド発✈対立と融和をめぐるモノガタリ】が文化庁AFF２助成、アイルランド大使館の後援を得て、ITI主催公演として荻窪の「劇的スペース・オメガ東京」にて上演することができました。

毎年12月に行っていたオンライン・クリスマスイベント『賢者の贈り物』は見送りとなりましたが、今年は実現したいと考えます。

’２２ ＩＴＩ戯曲翻訳部会報告　青柳敦子

2022年の戯曲翻訳部会の活動は、来年以降の準備に終始しました。

2023年に「ジェンダー」をテーマにしたリーディング・シリーズを開催予定。第一弾としてカナダ（ケベック）の作家ミシェル・マルク・ブシャール作『ローリエ・ゴードロが目覚めた夜』のリーディング公演をITIの主催事業として開催することが決まった。翻訳・演出は山上優さんが担当。

ほかにも候補作が挙がっており、今後準備を進める。またテーマである「ジェンダー」について、戯曲翻訳部会のメンバーも理解を深めたいと考えており、セミナーの受講などを検討しています。

会員消息

（順不同・敬称略）　2022年2月～2023年1月 事務局調べ

【個人会員入会】
那須佐代子（俳優・シアター風姿花伝支配人）
市村昌也（松竹株式会社）
伊東羊介（松竹株式会社）
斎藤明仁（上智大学大学院）
櫻井拓見（chon-muop 主宰）

【賛助会員 入会】
寺田倉庫株式会社

【個人会員 退会】
木村信司
居上紗笈
田尻陽一
中里毅
西川信廣
水落潔
毛利まこ
Yuma

【賛助会員 退会】
株式会社NHKプロモーション

【ご逝去】
斎藤偕子（令和3年12月23日）
※令和4年10月訃報通知
高田一郎（令和4年9月1日）
松田存（令和4年6月20日）

【叙勲・受賞】
池辺晋一郎
旭日中綬章
松竹株式会社南座
第77回文化庁芸術祭賞大賞
松竹株式会社歌舞伎座
第77回文化庁芸術祭賞優秀賞
松竹株式会社「桜姫東文章」
第29回読売演劇大賞 選考委員特別賞
中村梅玉
重要無形文化財保持者（人間国宝）
野村萬斎
第43回松尾芸能賞
松本白鸚
令和4年度文化勲章
TBSテレビ
第59回キャラクシー賞 テレビ部門 選奨、同賞 報道活動部門優秀賞
テレビ東京
第59回キャラクシー賞 テレビ部門 選奨

内閣府公益認定等委員会による日本センター立ち入り検査

国際演劇協会日本センターは2013（平成25）年6月に公益社団法人となりました。

公益社団法人は一般社団法人に比べてより公益性が高く、公益性の確保のために「公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」第27条により、3年に一度、内閣府公益認定等委員会による立ち入り検査を受けることになっています。

昨年一昨年はコロナウイルス感染症の影響があり、弊センターへの立ち入り検査は2017年度以来5年ぶりでした。検査は、2022年6月24日（金）に国立能楽堂内の弊センター事務局にて行われ、会計事務や必要書類の整備等についての助言を受け、無事に終了しました。

（事務局長　曽田修司）

編集後記

▲日本センターが「紛争地域から生まれた演劇」シリーズに取り組んでから14年になります。昨年来「紛争」の拡散や全面化を目撃して、世界をよく知ること、開かれた視点を持つことの重要性を改めて感じる一年でした。ITIがその創設以来目指してきた「演劇による相互理解の促進と平和構築」の理念の大切さを思い、70年を超える歴史を持つ日本センターの活動の重みを感じています。（曽田）▲8K超高精細の巨大画面で舞台劇『アルキメデスの大戦』を見た。ロングショット、カット割りなし、定点撮影の大舞台。等身大の俳優の表情、演技は普段見る劇場の迫力と何ら変わらない。外国の演劇祭に参加するとき生身の人間の一座を率いる必要がなくなるかも。日本センターが参画するEPAD事業（10P参照）にもこの技術が活用される。超大国の巨大資本が乗り出す前に有効利用を。（菱沼）

（© 国際演劇協会日本センター 2023）

I.T.I.
第134号
2023年1月31日発行
発　行　公益社団法人国際演劇協会日本センター
発行人　永井多恵子
編集人　曽田修司　吉岩正晴　菱沼彬晁
住　所　〒151-0051　東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1 国立能楽堂内
Tel03-3478-2189　Fax03-3478-7218
Email:mail@iti-j.org
URL http://iti-japan.or.jp

広告　松竹